大岡昇平「暗号手」の方法

――初期作品の系譜・〈死者〉という身分――

佐藤洋一

一、本稿の目的と方法―初期作品と大岡の方法―

大岡昇平の初期作品、「出征」「海上にて」「暗号手」「襲撃」「靴の話」等の作品は戦争体験という事実の記録やエッセイとしてのみ扱われ、大岡の戦争小説の方法と文体を探るという視点から、また、作品として独立した価値を認める立場から論じられたものは、これまでほとんどみることができない。

しばしば取り上げられ論じられてきた「歩哨の眼について」「敗走紀行」「出征」等の論点にしても、大岡の思想の展開の補助資料としての扱いや、『俘虜記』『野火』『レイテ戦記』等を論ずるための、いわば習作的な扱いが多いということができる（注1）。

本稿は、初期作品の一編である「暗号手」を取り上げ、作品としての特質と構造（文体）を探るとともに、戦争体験（記録）を大岡がどのように小説化していったのか、小説家大岡昇平の方法と文体について考えるものである。こうした視点からの初期作品の考察は同時に、『俘虜記』『武蔵野夫人』『レイテ戦記』等の文体的な独自性と展開、方法的な関係や作品の系譜等のつながり等をもより鮮明にすると思われる。

二、大岡昇平・戦争小説の方法と構図―三つの系譜と方法―

「暗号手」は一九五〇年（昭二五）『風雪』二月号に発表され（初出文末は《四九、一二、二》）、単行本『サンホセの聖母』（昭和二五年六月、作品社）に「出征」「海上にて」「襲撃」「靴の話」「食慾について」「俘虜逃亡」等ともに収められた。この時期は、後に「捉まるまで」を含むいわゆる合本『俘虜記』（昭和二七年一二月、創元社）としてまとめられる作品群が発表されていた時期でもある。

「暗号手」を含むこれらの初期作品を、頻出する主要なモチーフや文体の特質等から整理すると、次の図に示したような方法・文体の特質と三つの作品系列（系譜）を指摘することができる（注2）。

大岡昇平の戦争小説の方法と構図

A……戦争体験の中の「事実」／象徴化
B……「国家」に支配される「個人」の深層の真実
C……「個人」を動かす「目に見えない力」の構造的把握と描写

A　戦争体験の「事実」
・戦友の死と行動／関係
・象徴的な「事実」

B
個人の内面の探究
・意識と無意識
・意識の変容と解釈
（狂気／感覚の錯誤、その意味）
・人間の探究

C　環境世界（外部）の探究
・個人を動かす見えない力（国家・政治・教育等）
・戦場の環境（自然／敵／ゲリラ等）

(1)戦場における「真実」の探究
(2)現代日本人の「真実」（生きる根拠／意識と無意識）
(3)『歩哨の眼について』『出征』『襲撃』他

(1)象徴的な「事実」……〈軍靴〉〈食欲（欲望）〉〈千人針〉等
(2)戦友（死者）……小林一等兵／中山
(3)『靴の話』『食欲について』『襲撃』『暗号手』『出征』他

(1)戦争の「全体性」の構造的理解（『レイテ戦記』）
(2)個人の行動／感覚の「深層」にあるものの探究（教育／政治／国家／その他）
(3)『サンホセの聖母』『敗走紀行』『出征』『襲撃』他

1〈戦友の肖像型〉

2〈自己の体験記録型〉

3〈外部世界（環境）の記録型〉

1〈戦友の肖像型〉は、作品の中で戦友のある肖像の記録を中心に「私」との関係でどのように変化し死んでいったか、その意味について探る型の作品群である。大岡自身「私はこれまで小説の形で、前線で知った戦友の肖像をいくつか描いた」（注3）と語っているように、戦友の肖像を「小説化」した作品群の一部であり、戦場や軍隊における「真実」を探究する試みであるとともに、偶然死を免れた大岡自身の〈もう一つの自己〉を探る試みでもある。つまり、これらの作品系列は戦友の肖像を通して、死者となったいわば〈もう一人の自己（分身）〉へのレクイエム（鎮魂）が中心に描かれている作品群である。

2〈自己の体験記録型〉は、召集から出征、戦場での戦いや敗走から俘虜になる過程が「戦争の記録」として語られる点が中心だが、体験の記録という表層のテクストの深層に大岡独特の心理描写を通して軍隊や戦場の真実（意識と無意識）、兵士を支配する〈目に見えない支配力〉の構造（制度や他者等）を照射するように描くところに特色がある。「出征」「歩哨の眼について」「捉えるまで」等の作品群がこれにあたる。

3〈外部世界（環境）の記録型〉

この型は、1と2に共通して、しかし断片的に描かれている〈個人を支配する眼に見えない力〉の構造を探究する文体の作品群である。大岡を動かす「世界」「環境」「外部世界」は、さらに以下にまとめられるような三つの要素から描かれている。(1)地理的自然的環境（自然環境の論理的な把握）、(2)教育的倫理的な環境（危機的状況に発現する個人の深層）、(3)国家的政治的環境（御真影教育や軍国主義等）。作品では「サンホセの聖母」「敗走紀行」等の系列作品がこれにあたる。

さらに、以上の三つの作品系列（系譜）の内部では、次に示す三つの要素が作品の方法＝文体を構成する重要な特質として指摘することができる。以下、要点を示す。

一つは、軍靴・千人針・食欲等、戦場における象徴的な「事実」のもつ意味が拡大される「A戦争体験の『事実』／象徴化」の方法である。二つ目は、感覚や意識の変容・意識と無意識の文体等によって人間の真実が描かれる「B『国家』に支配される『個人』の深層の真実」の方法。そして三つ目は、「C『個人』を動かす『目に見えない力』の構造的把握と描写」の多面的な探究の方法である。なお、これらの三つの作品系列（系譜）にわけられる特質とA～Cの方法的特質は、作品の主要なモチーフや題材、作者の方法意識等によってそれぞれ重なっている。

三、〈戦友の肖像型〉としての「暗号手」

「暗号手」は「襲撃」（注4）とともに〈戦友の肖像型〉の典型的な作品である。東大出身のインテリ兵士中山が何故死期を早めたのか、そして何故大岡は死を免れたのかを、前線の軍隊内部における人間関係・戦争に対する思想・極限状態で発現する人間性の本質等を通して描かれているからである。

「暗号手」の構成は、前半と後半の二つに分かれているが、事件やエピソードのまとまりから12の場面に分けて考えることができる。このように分けることで、中山の人間像の変容と大岡の小説の構成意識や文体の特質がよりとらえやすくなると思われる（注5）。

前半の冒頭は、「敗けた軍隊で使用していた暗号なぞ興味あるものではあるまい。（略）私一個の思い出のためにも、ここに書き留める機会を逃したくない」（1場面）とあたかも個人的な思い出の記録のような形で始まる。続いて、暗号手としての大岡の位置や役割（仕事内容）、上官との関係、そしてそれらは大岡の〝会社員の知慧〟という点に方法的に焦点化されて描かれることになる。

1場面、状況設定（時代・場所・人物／サンホセ警備隊所属の「私」）
2場面、暗号手の仕事や役割、軍隊内での地位
3場面、「私」の〝会社員の知慧〟と下士官の不満
4場面、「私」と中隊長（「温和なノモンハンの生残り」）との共感
5場面、日本軍の劣悪な状況（私の銃は廃銃）
6場面、「私」の決意（戦争・死）と、暗号手の代理養成の意図

後半は暗号手という仕事における〝会社員の政治学〟の悲劇とその意味が、「私」の代理として養成した中山の人間像の変化を通して描かれている部分である。最後に中山の死とその人間像についての「私」の解釈（考察）と鎮魂が語られている。

7場面、インテリ兵士中山の設定・その人間像（「私」の暗号手代理）
8場面、中山と「私」の関係の逆転（中山の昇進と〝会社員の政治学〟）
9場面、「私」の決意（「一夢想家として死ぬ」）と無意識の考察
10場面、戦況の悪化と中山の疲労・悲観
11場面、中山と「私」の関係の変化
12場面、中山の死と「私」の解釈（考察）

四、戦友中山の人間像と変化

この作品で、戦友中山は重要な役割を持つ人物として語られている。前半の1～6場面は、エッセイ（記録）のような語りでありながら小説の方法という点から見直すと、後半の中山の変化と死を際立たせるために巧みにエピソードや人物が選ばれる等して組み立てられている。

例えば、「私」の〝会社員の知慧〟と中山の生き方の共通性とその違い、「私」の決意の表層と深層、金と就職の斡旋のために中山を庇護する軍曹、模範兵とはいえない中山を昇進させる分隊長等々、インテリ兵士中山という〝会社員の政治学〟を

生きる人物を強調する表現装置としてそれぞれの立場から語られていると読むことができるのである（注6）。

この作品での中山の人間像の設定とその変化は、結論を急げば「戦場における『人間』の発見と批評」「軍隊という非日常の中の『日常性（深層）』の発見と批評」という大岡の戦争小説のテーマを描くための重要なステップになっているのである。以下、人物像の要点とその変容を簡単に整理しておくことにする。

(1)〝会社員のマキァベリズム〟を生きる男（7場面）

中山の年齢や経歴、職業、体型や外見等については、三六歳・東大の経済学部を出ており、現在は「或る鉱業会社の高級社員（課長）」である。「体躯は貧弱であるが、額が広く眼が大きく、白い肌は女のようにきめが細かくて、なかなかの好男子」であったと語られる。分隊を異にはしていたが内地の部隊では同班であったため、出征を機によく話し合った事等が「私」との関係をもつ接点である。

中山の人間像の中で焦点化されている重要な特質、特に〝会社員のマキァベリズム〟は三つのエピソードで生き生きと語られている。例えば、同輩の二等兵の間柄にも関わらず、「私」が暗号手の代理として中山を推薦してくれたことに感謝して中山が「私」に「上官に対する礼」をするエピソードでは、自分の出世や保身のためには平気で媚へつらう態度の片鱗が語られる。また課長という地位と金の威力を利用して軍曹に取り入り、軍隊内での自分の地位を有利にしようとする、つまり出世と自己保身のために相手の弱みに付け込み巧妙に立ち回る態度等が効果的に語られている。

(2)中山の昇進と「私」の転落（8場面）

中山は分隊長や軍曹に金を渡し軍曹に帰還後の就職の約束をする等して巧みに取り入り、その結果、模範兵としての「肉体的美点」に欠ける彼がいち早く上等兵候補になる。中山の出世と引き替え「代理ができた私の地位は転落」し、「私」は階級も二等兵のまま残されることになる。中山との議論や彼の行動が語られるエピソードでは、暗号手に推薦された頃とは豹変し戦況についての議論の場でも、正しい認識や推測よりも上官である中山が「私」の判断を権威と優越感から否定する様子が語られる。そして、衛門を二人で出入りする時にも、「私」よりも自分が上官であることを示すべく「彼は必ず私の右側へ廻って自分で号令」をかけるのである。

(3)戦況の悪化に伴う中山の変化（10～11場面）

戦況の悪化に伴い、会社も軍隊も同じこと・軍隊で株を上げると却って体を使わなければならない、という「私」の中山への忠告は現実のものになり、斥候等に選ばれ偵察に行かされることの多い中山は疲労が重なり、次第に悲観的になる。これは敗戦と死を決意した「私」の楽観主義とは対照的である。

(4)マラリヤに倒れ病死する中山（12場面）

中山はやがてマラリヤに倒れ一月二四日の敵襲に先立ち死し

でしまう。〝会社員の知慧〟で軍隊で出世しようとした彼は、過労が重なり死期を早めたが、「私」もマラリヤによる発熱で足が立たず見舞うこともできない状態にあった。死に際に中山は「私とSの名を呼んだそうである」。

五、死者という〈もう一人の自己（分身）〉

このような中山の人間像の語る「私」の視線は、自己を無垢なものとしてとらえたところからのものではない。中山の死期を早めた〝中年の会社員の知慧（会社員の政治学）〟という論理は、同時に「私」自身のものでもあったからである。

部隊に一人の暗号手として中隊事務所に専用の机を貰っている「私」は、朝僚友達が演習や使役を始める時間に事務室に入り仕事を行う。「その気でやれば一時間で」済む「事務的トリヴィヤリズム」を早く済ましてしまえば、「私の値打ちがなくなり、使役に使われる惧れ」があるため「出来るだけそういう作業をのろのろやったが、これは内地で会社員として永年机の前を胡魔化し続けてきた私の得意の芸の一つ」なのである（3場面）。

「私」の会社員として得た習慣（心得）は、自分が病気や事故等で死んだ場合の代理を一人養成しようと考えた時にも繰り返され語られる。代理養成が「私の独占的地位を危うくすること」に気づき「こういうことをすぐ考えるのも私が会社員として得た習慣」であり、「自分にしか出来ない仕事を作るのは出世しようとする会社員の心得の一つである」（6場面）。

しかし、ここから「私」と中山を分けるものは、二人の軍隊での生き方の違いである。「私」は、軍隊でいかに有利な地位を得、自己保身と出世を画策するかという会社員の知恵（「不幸な知慧」）を捨て「一夢想家として死のう」と決意していたが（注7）、中山はその「不幸な知慧」をまさに生きようとしていた人物であった。

次の9場面の引用は、「私」の夢想家としての死の決意についての考察の部分である（傍線は佐藤、以下同じ）。

A 私が代用品をつくる時考えた危惧は実現したのである。しかも私の選んだのが、正確に私が捨てようと決心した会社員の知慧を、積極的に活用しようとしている人物で、私が直接その被害者とならねばならなかったのは皮肉であった。夢想家たらんが私の決意であった以上、私に別に不服をいう筋はないはずであったが、

B しかしなんとなく面白くなかったのは事実である。

C1 もっとも私の決意もあまりあてにならない。何かあるととかく自分の決意を自分に納得したがるのは私の癖であるが、

⇦ 識意　⇦ 無識意

これが一種の自己欺瞞にすぎないかもしれないのである。例えばこの場合私の夢想家の決意にしても、必ずしも自発的なものではなく、自分がうまく軍隊の仕来りに順応して行けない事実の反応にすぎないのかも知れない。

C2 結局私は押しつけられて初めて決意するわけですべては私の怠惰と愚図から出たとするのが正確であろう。

（9場面）

引用したA～C場面には、「私」が正確に捨てようとした〝会社員の知慧〟を積極的に活用した中山の被害者になることで、「私」の決意の深層に「一種の自己欺瞞」・自発的な決意ではない「怠惰と愚図」な要素を再発見する場面である。

ここでの表現（解釈）によって、中山は大岡の〈もう一人の他者（分身）〉として語られ、12場面では日本社会・日本人の一典型的な要素をもった人物として語られることになる。

ところで、この場面は大岡の決意の脆弱さや人間的な弱さの告白ととらえるよりも、自己の「意識」の深層を論理的に分析的に探究しようとする、大岡の論理的な文体の特質の一端を読み取ることができる場面であると考えられる。大岡の論理的な文体を構成している特色の一つは、「意識」と「無意識（感覚・感傷や幻覚や狂気・夢等）」の交錯を段階的に描き、「意識」の深層により深い真実を発見する心理考察の過程が、そのまま自己と世界を探究する文体となっている点にあるからである（注8）。

9場面の場合、A場面は「私」の行為の論理的帰結としての事実を語る「意識」の表現であり、B場面は「意識」では割り切れない「無意識（気分）」が「なんとなく面白くなかった」と語られている場面、そしてC場面はB場面の不愉快の原因についての「考察と認識」の場面である。つまり、「意識」の場面（論理的な認識・A場面）→「無意識」の場面（不合理な感覚・B場面）→「無意識」についての考察と認識（意識の深層＝無意識の「意識化」・C場面）という三段階によって「私」の意識の深層が描かれているのである。

この部分を「歩哨の眼について」「野火」等にも共通する自己探究の文体（意識と無意識の交錯）として整理すると、おおよそ次のような図式として示すことができる（注9）。

A／意識レベルの描写……論理的認識（生死・国家・外部世界等に対する正確な認識と思考や状況判断）。兵士としての視覚（歩哨の眼）の変化等。

B／無意識レベルの描写……不安や感覚のズレ・身体や視覚の変化（感覚的混乱や幻覚・幻想・身体異状・錯覚等）。浅いレベルから深いレベルへの段階もある。

C／無意識（Bレベル）の「意識化」の描写（認識）……論

理的認識（Aレベル）の深層（真実）の発見。より深い認識への到達を意味する（個人内部・国家や組織の真実）。

六、〝会社員の政治学〟と軍隊の真実

次の引用は、中山の死についての「私」の解釈が述べられている作品末尾の部分である。ここには戦友の死の深層を明晰な論理と優しさで語るとともに、その悲劇の意味を軍隊（前線）という小社会を通して日本社会・日本人の問題としてとらえようとしている作者の視線を読み取ることができる。

ともかく、こうして中年の会社員の知慧によって軍隊で出世した彼は、そのため死期を早めた。しかし今私が生還しているのは別に出世しなかったためでもなければ、山中で楽観的であったためでもない。Sも死んでいる。

中山の会社員気質を私は幾分意地悪く書いたような気がする。それは多分今なお私の内にある会社員気質と、文学という悪い根性のさせる業である。かれが愚劣に戦った日本陸軍の犠牲者であることはいうまでもないが、仮に生還したとして、彼がやはりあの陰惨な会社員の政治学を押し進める他はないとすると、彼はやはり不幸である。彼は依然として何かの犠牲者であることはかわりない。

彼は結局その皮膚が女のように柔らかいように、心も優しかったのであろう。状勢が絶望的になると、不意に私に優しくなったのがその証拠である。軍隊で出世しようと思ったのも、単なる防禦にすぎなかった。要するにこれは一個のおとなしい男であった。／中山の霊よ安かれ。

（12場面）

大岡は、中山の死の直接的な原因は決して軍隊で出世しようとしたことではないし、大岡自身の生還は「別に出世しなかったためでも、山中で楽観的であったため」でもない、と語る。中山の死期を早めた〝会社員の政治学〟は大岡自身がもつものでもあるからである。

中山が「愚劣に戦った日本陸軍の犠牲者」であるとともに、仮に生還していても「彼がやはりあの陰惨な会社員の政治学を押し進める他はないとすると、彼はやはり不幸である。彼は依然として何かの犠牲者であることにかわりない」と語られるとき、日本陸軍（軍隊）における出世と〝会社員の政治学（知慧）〟の悲劇的なアナロジーを通して、一つの優れた日本人論としての批評性が鮮明になると思われる。

中山は〈死者〉という、大岡の〈もう一人の自己（分身）〉なのである。これは、インテリの戦友中山の肖像をレクイエムの思いとともに描いた、一つの優れた日本人論とも読むことができる作品なのである。

七、作品の構造と批評性

この作品は、冒頭の文体や「私」による語りの方法からも、一見すると暗号手としての大岡の前線での体験記録の一つとして読まれがちである。前半は、前線における暗号手としての仕事内容と上官たちとの関係や大岡の決意が語られているし、後半は中山との関係とその死が自己の体験記録の文体として語られているからである（注10）。

しかし、「暗号手」を方法的に見てくると、例えばまず「私」という語り手＝報告者の眼《中心人物＝報告者》を通して、中山という東大卒のインテリ兵士（戦友）《対比的人物＝中心人物／戦友等》が設定され、軍隊における〝会社員の政治学（マキャベリズム）〟という《象徴的「事実（観念・思想等も）」》がクローズアップされている。初期作品の中での《象徴的「事実」》の設定のしかたにはバリエーションがあり、例えば〝軍靴〟（「靴の話」）・〝千人針〟（「出征」）と作品の題材やモチーフによって異なるが、「暗号手」にみられる軍隊という社会／〝会社員の政治学〟とそれを生きる男としての中山の生き方の深層に、日本社会（現代人）とのアナロジーを見るという発想は、『俘虜記』後半の重要なモチーフである俘虜収容所の事実と占領下の戦後日本アナロジーの発見と批評にも通ずるものである。

また、この作品では「一夢想家として死ぬ」という「私」の決意について心理的な分析が意識と無意識のレベルで繰り返され、その真実（深層心理）を探究する文体を形成しているが、こうした《「心理分析と認識の過程」「意識と無意識の文体」》は、他の作品では幻影を見る「感覚的錯誤」の解釈や心理的ヒューマニズムの限界についての分析（「襲撃」）、海上の「幻影」の解釈・千人針放棄の動機の解釈（「出征」）等として描かれている部分との共通な方法意識を読み取ることができる。このように考えると、「私」と同年配で、東大出のインテリである中山の軍隊での自己保身と出世主義（〝会社員の政治学〟の応用）の行動の記録と人間像と死、「私」との立場の逆転等の関係を通して浮かび上がってくるのは、一つには戦況が悪化した前線での日本陸軍の「ある真実」であり、戦争そのものの「構造」である。それは〝会社員の政治学〟と重なる日本陸軍の社会（軍隊の真実）であり、戦場の非人間的な「日常」と〝会社員の政治学〟のはびこる「非日常」の交錯でもある。

もう一つは、中山の行動と病死の意味の深層に、つまり彼の軍隊内における出世と「単なる防禦」（保身）という〝会社員の政治学〟の深層に、日本社会（「会社」にみられる秩序）・日本人の生き方のある縮図を読みとろうとする作者大岡の批評的な視線である。

以上、「暗号手」の作品としての批評性を、大岡の戦争小説の方法という点からとらえなおすと、体験記録を生かしながら一つは後半の中心人物として設定されている中山の人間像の変化と語り手である「私」の解釈（考察）を通して、戦場（軍隊・戦争）における「人間」の真実の探究と発見・批評を描い

ているということが重要である。もう一つは、”会社員の政治学“という日本社会・日本人の生き方を一つの焦点として、軍隊という非日常の中に潜む日本人／日本社会の「日常性（深層）」の意味と発見を語っていると読むことができるだろう。

おわりに

大岡文学は「捉まるまで」を序章とする定本『俘虜記』が小説家大岡の原点とされ（注11）、それ以前の初期作品については大岡自身が”小説の形で“描いた／“小説化した記録”等と語っているにも関わらず、小説としての方法的な特質の面からの考察はみられなかった。

『俘虜記』に結実する方法意識が初期作品の中ではどのように模索されてきたのか、関連性や系譜はたどることができるのか。あるいは、教育召集から一転して出征することになった経緯を語った「出征」という作品は体験記録そのものと受けとめられがちだが、妻からもらった千人針を海に棄てる行為がフィクションであるように（注12）、事実の記録の部分とフィクションが小説化という点から、どのように方法的に構築されているのか等に着目することも大岡文学全体の特質を考えるうえで必要不可欠である。「小説化」とは、単に事実と虚構の相違の問題だけではなく、戦場の「事実」の切り取り方や焦点化の方法や角度、「事実」（靴や視覚、錯覚や幻視等）をめぐる心理的な解釈や「私」の感覚・無意識の描写……、こうした方法意識や構造、作品の批評性の中にこそ大岡の小説家としての本質があるのではないかと、私には思われるからである。

「暗号手」にみられる「戦場における『人間』の発見と批評」「軍隊という非日常の中の『日常性（深層）』の発見と批評」という大岡文学の大きなテーマは、『俘虜記』『野火』等を貫き、さらに独特な心理描写（意識と無意識の交錯・感覚の変容等）や「語り手」の想像的解釈の文体となって、この後も変奏されていくことになる。

注記

1、大岡昇平の初期作品の系譜・方法論の中で論じた拙稿には次のようなものがある。「大岡昇平の言語技術―『歩哨の眼について』における〈知覚〉の遠近法―」（『愛知教育大学大学院　国語研究　第4号』愛知教育大学、平成八年）、「大岡昇平『出征』の文体―初期作品の系譜と方法―」（『同第6号』同、平成一〇年）等。

2、ここに示した三つの作品系列（系譜）とA～Cの方法的特質は、単に初期作品の文体の特質を示すだけではなく、大岡の戦争小説の〈構造〉の枠組みを示すものとしてまとめたものである。

3、大岡昇平「忘れ得ぬ人々」『別冊文藝春秋　第三四号』昭和二八年六月。

4、「襲撃」（一九五〇年『新小説』五月号）では、小林一等兵という勤勉で親切な二二歳の衛生兵がゲリラの攻撃を受け戦死する。戦死する前、小林は「天皇陛下万歳」と言って死ぬがこれは彼の思想を支配している〝御真影教育〟という道徳による人間支配の悲劇を語るものであり、中山を支配した〝会社員の政治学〟の別な表現となっている。

5、本文の引用は全て『大岡昇平全集2』（筑摩書房、平成六年一〇月）による。

6、初期作品には幾つかの要素（方法やテーマ等）が混在し、作品としての完成度や密度にやや欠けるものが見られる。そのため却って方法的特質が露出していたり、大岡の小説的な試みや配慮を読み取れるような気もするが、こうした点についての考察は今後の課題の一つである。なお「暗号手」の前半は〈自己の体験記録型〉の要素が強く、後半は〈戦友の肖像型〉の典型的要素をもつ作品とも読むことができる。

7、「たとえ上官には気に入られなくとも、生まれついたままの一夢想家として死のうと決心していた」（6場面）の夢想家の決意には大岡独特の意味（国家と自己への批評意識）が込められている。例えば、「出征」の中で妻から貰った千人針を無意識の内に海に捨てる場面では「これは（出征と来るべき確実な死のこと・佐藤注）純然たる私一個の問題であって、家族のあずかり知るところではない」と語られている。

8、大岡の論理的な文体の特質を「意識」と「無意識」の交錯する文体の構造という点から考察したものに拙稿「『野火』における自然描写」（『言語と文芸　第一〇〇号』大塚国語国文学会、昭和六二年）、「大岡昇平『靴の話』の言語技術―メタフィクション構造の文体―」（『愛知教育大学大学院　国語研究　第5号』愛知教育大学、平成九年）等がある。

9、注1・8の拙稿に同じ。

10、大岡自身の暗号手勤務の状況については、「一にヨーチン、二に暗号」『戦争』（昭和五三年一〇月、九藝出版）に詳しい。

11、吉田熙生『鑑賞日本現代文学二六　大岡昇平・武田泰淳』角川書店、平成二年一二月）。

12、『大岡昇平・埴谷雄高　二つの同時代史』（岩波書店、昭和五九年七月）。

（さとう　よういち）